

中国観照（第八回）

中国撤兵と日米戦争の回避工作

——岩畔豪雄「昭和陸軍謀略秘史」が教える真実

矢吹晋（二一世紀中国総研ディレクター）

「敗戦認識」が曖昧な安倍七〇周年談話

本誌前号の安倍七〇周年談話批判を敷衍する。この談話の最大の欠陥は、対米戦争で日本が敗れた事実を強調し、「被害者日本」を強調しているが、日中戦争において「日本が敗れた事実」に対する認識が曖昧模糊としていることだ。実はこの欠陥は、玉音放送の欠陥と符合するもので、いわば国民的認知症の現れである。

今年（戦後七〇年）を期に音声のよりクリアーな原盤が放送され、さまざまのコメントがなされたが、放送内容、すなわち詔勅の論理的欠陥を分析したものは皆無ではないか。終戦の詔勅では、「米英に対する宣戦」を不本意なものとしただけで、中国に対する「布告なき開戦とその敗戦」には言及していない。「宣戦を布告していない」故に、戦争に非ずというのか。中華民国政府は二月九日付で対日宣戦布告を行っているが、日本は対米英の宣戦布告だけで、対中国は布告なしだ。

こうして「一九三二―四五年日中戦争」が消えたことが重大だ。日中戦争は「開戦も敗戦も」公式に言及されない奇怪な戦争として扱われている。

「他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キ」とは、まさに日本が満洲や台湾、そして朝鮮半島で典型的に示した行為であり、それ故カイロ宣言を踏まえたポツダム宣言の領土条項——「満洲、台湾及澎湖島ノ如キ日本國カ清國人ヨリ盜取シタル一切ノ地域ヲ中華民國ニ返還スルコト」を遵守させられたことは誰にもわかる。しかしながら歴史的事実は周知のことでありながら、「終戦」は「交戦四歳」についてのものと認識されて「日中戦争の敗戦」は行方不明なのだ。この戦争の「終わり方の曖昧性」が対日不信の原点だ。そして今回の安倍談話もまた、対中「敗戦認識」はきわめて曖昧だ。中国当局が戦後六九年を経た昨年に、「抗日戦争勝利記念日」を「毎年九月三日とする」ことを定め、初の軍事パレードを挙行したのは、日本流の曖昧な「敗戦認識」に反省を迫るものだ。「敗戦を認識できない日本」はふたたび「開戦に動く危険性がある」と彼らは危惧した。しかしながら、このメッセージもまた日本に伝わらない。かくて日中・日米戦争は分断され、前者は後者によって覆い隠されたままになっている。この日米中三角関係を考えるに相応しい本が出た。

『昭和陸軍謀略秘史』の刊行

一九七七年に私家版『岩畔豪雄氏談話速記録』（非売品）として刊行された岩畔回顧録が戦後七〇年の二〇一五年に『昭和陸軍謀略秘史』として日本経済新聞出版社から刊行された。補論「私が参加した日米交渉」は、開戦回避の努力がいかにか潰えたかを活写する。岩畔は日米関係が袋小路に陥った経緯の説明から始める。「日米両国の国交は一九二一年のワシントン軍縮会議以来悪化の一路をたどった。特に一九三一年の秋突発した満洲事変は当時の米國務長官スチムソンの言動に徴しても明らかのように、両国の関係を一段と険悪ならしめた」更に一九三七年の夏、日華事変が発生するに及んで、両国間の国交は慢性的険悪状態に陥った。つまり満洲事変で「険悪」になり、盧溝橋衝突で「慢性的険悪状態」に陥った。そして「一九四〇年九月近衛内閣によって日独伊三国同盟の成立が突如として公表せられると両国の関係は慢性的険悪状態から急性的危険状態に転移した」。つまり三国同盟で「危険状態」に陥った。

「爾来米国は対日輸出制限を強化して戦略物資の日本への流入を妨害すると共に所謂A（米）、B（英）、C（中国）、D（オランダ）ラインを結成して対日封鎖の態勢を整えるに至った」「このような情勢は日本国内に於ける国家主義乃至民族主義的思想を高揚せしめると共に親独伊的勢

力を伸長せしめた反面、親英米的勢力を衰退せしめることになった」（二六七―八頁）。これが岩畔訪米の前夜の事情だ。

ここで二人の牧師が登場する。「米国のカトリック僧ウオルシュ、ドラウトの両牧師が日本を訪れたのはこのような険悪な国内情勢が進行しつつあった一九四〇年の一月末のことである」。「ウオルシュ師は中国布教十数年の経験を有し、メリノール（法王直轄の海外布教本部）を主宰する高德の牧師であり、又ドラウト師は中国及び日本布教数年の経験者で、メリノールの総務部長の地位に在る有能な牧師であった」。「二人の牧師はストロース氏の紹介状を携えて産業組合（現農林）中央金庫理事井川忠雄君を訪ねてきた」。「両牧師は井川君の配慮で近衛総理、松岡外相、池田成彬氏その他朝野の有力者に会見したが、その構想に異論を挟む者はほとんどいなかった」。「井川君は近衛総理の勧告に従い、陸軍の意向を打診するため、二二月初、私（陸軍省軍務局軍事課長）を訪れて、両牧師のことを述べ、両牧師を陸軍省首脳部に引合すことを依頼した」。

「武藤少将は翌日両牧師を官邸に迎えて、その構想を聴取し彼等の構想に原則的に同意する旨答えた」。「両牧師は前途に光明を抱きつつ、四〇年二月初め帰国の途について」（二六八―九頁）。二人の牧師はルーズベルト大統領といかなるコネをもっていたのか。

「両牧師をルーズベルト大統領に引合せたのは郵政長官フランク・ウォーカー氏である。ウォーカー氏は弁護士を本業とする政治家であるが、約二〇年間にわたってルーズベルト大統領の選挙事務長を勤めたためその功績を認められて郵政長官の椅子を与えられていた」。こうして両牧師は、ウォーカー選挙参謀——大統領のラインでルーズベルトにパイプを作った。そして「両牧師が携えて来た、日米国交打開策の骨子は『ルーズベルト大統領と近衛総理とを太平洋沿岸（アラスカ又はハワイ）に於て会見せしめ、日米両国間の懸案を一挙に調整すること』を目的とし、その前提条件として、『ヨーロッパ戦争に対する両国の態度』、支那事変解決策、『日米通商問題』等基本問題に関する両国の意見を調整しようとするものであった」（二六九頁）。

さて二人の牧師を迎える日本側の事情はどうか。「当時日本国内の対米世論は漸を追うて硬化しつつあったが、政界、陸海軍等の首脳部間には対米国交調整を希望する者がまだ残っていた。そこで政府は当時欠員になっていた駐米大使の補充を急ぎ、前外務大臣海軍大将野村吉三郎氏を選んだ。野村大將は米国の事情に精通しているばかりでなく、その円満な人格は何人にも好感をもたれる人柄であったから、同大將の起用は近来に無い名人事と噂せられた。外務大臣松岡洋石氏は我国の伝統たる親英米外交を親独伊

外交に切り換えた張本人であるが、一九四一年初頃の彼はまだ対米国交調整に熱意をもっていた」（二六九―二七〇頁。傍点はすべて引用者、以下同様）。「ところが、井川君の渡米に関し、（中略）松岡外相及び外務官僚は極めて冷淡であつたばかりでなく、妨害をさえ加えた」（二七〇頁）。二人の牧師と井川忠雄のチャネルがつながりかねていたとき、「一九四二年二月初になると、私は野村駐米大使の特別補佐官として渡米する内命を受けた」（二七一頁）。その舞台裏を岩畔は語っていないが、察するに、このチャネルを活用すべく、岩畔が知謀をめぐらしたのではないか。

カーネル・イワクワの名が米国務省の文書に初めて登場するのは、一九四一年二月二五日付スミス経済担当参事官補の国務省宛報告である。そこでは井川忠雄の言として岩畔大佐を「陸軍を動かす実力者の一人」(one of the driving forces of the Army)と紹介している。

ハル国務長官は野村大使と三月八日に会見したが、それをグルー大使に告げる文書のなかで、支那問題の全局に詳しい岩畔大佐がワシントンに向かっていると伝えている。

三月一三日付郵政長官ウォーカーから国務長官ハルの覚書では、この件を「極秘」(absolutely confidential)としつつ、想定される両首脳間のホノルル会谈の参加者を近衛のほか、若槻礼次郎男爵、郷誠之助男爵、平沼騏一郎男

爵、武藤章軍務局長、岩畔大佐、岡敬純提督らを挙げてい
る。ここで特に興味深いのは、ウォーカーから國務長官ハ
ル宛に説明した追伸の一句である。「今日の午後栗栖大使
はワシントンの大使館に電話したが、若杉公使は國務省と
の応接で多忙なので栗栖に会えないと答えた。実は若杉は
本国政府の真の意図を何も知らないのだ」。

グルー大使は三月一三日付（國務省着四月二日）の頁五
報告で岩畔が渡米前に『ヘラルドトリビューン』（*Herald
Tribune, February 25, 1941*）に行ったインタビューで、日米
戦争が万一起こるならば、最も愚かな事件だと語った記事
を送った。米國務省の記録に残された文書を読むと、日米
関係が危篤状態に陥る中で、これを打開するエースとし
て、カーネル・イワククロに大きな期待が寄せられていた事
情を理解できる。

栗栖三郎、ドイツ大使を更迭される

再び岩畔の記録に戻る。彼の野村評はこうだ。「野村大
使はかつて駐米武官を勤めたことがあるので米国人の中に
多くの友人をもっていた。しかし、大使の旧友の大半は軍
人の古手であったから、これらの旧友を動かして現政府の
要人に働きかけることはほとんど不可能に近かったし、又
若杉公使以下の外務官僚に好機捕捉の期待をかけることは
更に難しかった。駐米大使館がこのような無為無策の状態

にあつたとき井川君がすい星のように野村大使の前に現れ
て、日米折衝の契機を作った」「若杉公使以下外務官僚は
初めから井川君に対して好意をもっていなかったが、カー
ルトン事件以来嫉視と反感を露骨に表すようになった。
しかし野村大使だけは益々井川君を信用するに至った」
（二七二―二七三頁）。ワシントンの日本大使館が一九四一年
前半にどのような雰囲気のもとにあつたかを岩畔はこのよ
うに活写している。

渡米に先立ち、岩畔は各界の有力者と会い、意見を徴し
た。「私が渡米前に会見した人々のうち、最も印象的であつ
たのは井上日召、天野辰夫氏等十数氏錚々たる右翼の連中
であつた」「余談になるが、この席上井上日召氏が「私の心
の中には完全な天皇がいる。この天皇と現実の天皇との間
に喰い違いが生じたら、私は心の中の上皇の命令に従つて
行動する」と云つた言葉は私の心に割り切れないものを残
した。井上氏の主観的な天皇観は、考え方によってはこの
上もない危険思想である」と云わねばならない」（二七九頁）。

さて親日派として広く知られていた「グルー大使は沈痛
な面持ちで、『今が日米国交回復の最後の機会である』こ
とを強調した後『健闘を祈る』旨を述べた」。これに対し
て日本との距離をとることによって國務省内での地位保全
を図るドウマンはこう述べた。「ドウマン氏の話は固より

外交的辞令であつて、米國が日本に対して戰略物資の輸出を禁止していることは「日本を適性國と認めてゐるからである」と判断した（二七九―二八〇頁）。

こうして岩畔は「陸軍、海軍及び外務の各省事務當局に挨拶回りしたが、これ等役所の主務者達はほとんど異口同音に日米和平の意見を述べ、主戦論を唱えたものは一人もいなかった」「一九四一年前半に於ける日本朝野の与論の大勢はまだ和平論であり、主戦論を明瞭に打出してゐたのは一握りの右翼に過ぎなかつた」（二八一頁）。

岩畔は、サンフランシスコでドイツ大使を更迭され、米國經由で帰國途中の栗栖三郎大使と会見した。「私が栗栖大使をその宿舎に訪れると、同大使は『日米國交調整は刻下の急務であること』と『野村大使から聴取したところによれば両牧師によつて提案せられてゐる日米國交打開策は極めて有望であること』を私に語つた。そこで私は『井川君から聞けば若杉公使以下外務官僚は井川君の活動に対し、妨害を加える傾向にあるらしい。ついでには栗栖氏は暫らく米國に留まり、直ちにワシントンに引返して、我々と一体になつて國難の打開に協力して貰いたい』と述べた」「若しこのとき栗栖氏が官僚的立場に捉われず、米國滞留の申請をして我々と協力することが出来ていたら、恐らく日米國交打開策はもつと明朗に、もつと強力に推進せられ

たに違ひない」（二八四頁）。栗栖は親米派の外交官として知られ、ヒトラーから忌避されてドイツ大使を辞めたばかり。ここで、ワシントンの大使館で孤立する野村大使を支えて、日米交渉最後の機会を活用すべきだと岩畔は説いたが、栗栖は動かかなかつた。岩畔が「栗栖氏が官僚的立場に捉われず、米國滞留の申請をして我々と協力することが出来ていたら」と書くとき、悔しさがにじむ。

さてワシントンについた岩畔は四月一日朝、大使館に出頭して野村大使以下の官員に挨拶した。「陪席した若杉公使も『本格的日米交渉は今後五、六ヶ月間の事態推移を見たと上で開始するのが宜しい』と至極悠長なことを云つてゐた」（二八七頁）。

八カ月後には、真珠湾攻撃が行われているのだ。ワシントンに勤務しながら日米關係がどこまで險悪かを認識できていない外交官若杉公使のずつこけぶりには啞然とするほかない。

「井川君の語るところによれば『同君から近衛総理宛の電報の発信を大使館に依頼したが、これに応じなかつたので、ニューヨーク駐在の西山勉財務官に頼み、大蔵省經由で発信した』とのことである。井川君に対する大使館員の反感は日米交渉の進展に伴い益々激化の傾向をたどつたが、野村大使だけは別で、その信頼は愈々厚くなつた」

(二八七頁)。岩畔はこのような場に栗柄がいて、井川忠雄の活動を支えてくれることを期待したのだ。

「日米諒解案試案」の作成

四月二日ドラウト師がワシントンに到着し、ドラウト、井川、岩畔の三名がほとんど徹夜で四月五日までに「日米諒解案試案」を作成した。四月七日から日米双方の意見を参酌しつつ第二試案の起草にとりかかった。最終案がまとまったのは、四月一六日朝であった(二八八―二八九頁)。

「日米諒解案は条約案ではなくて、日米首脳会談に先立ち両国間にわたる懸案事項の見解を統一しようとするものであるがこれを如何に取扱うかは極めて重要な問題である」。「米国国務長官ハル氏はこの難問をいとも手軽に解決した」。「四月一六日の午前、ハル長官の要請に基づきハル野村会見が行われた」(二九八頁)。

「外務省宛の暗号電報は若杉公使によって起案せられたが、重要な一点が故意に改変せられた。それは日米諒解案が米国政府の起案にかかるかのようにした点である」「このように改めるのが、本国政府の意見を纏めるために好都合であろう」との判断に基づいたものである」「四月二〇日外務省から機密費として五万ドル送ってきた。このことは外務省が日米交渉に熱意を示した証左と受取られる。するとこれまで日米諒解案に対して極めて冷淡であった事務

官僚は極度にあわて、先に述べたように、井川君を交渉から除外しようとした」(二九八―二九九頁)。交渉を冷淡に扱ひ、時には妨害していながら、本省が評価した途端に、手柄を横取りしようとする外交官たちの右往左往が巧みに描かれてゐる。岩畔は特に意識して大使館員を戯画化したわけではないが、岩畔が時には、異例の形式さえ厭わずに交渉を進めた結果、これに対する妨害勢力、抵抗勢力があまりだされる構図である。

この諒解案について、「米国側は諒解案の返事を急ぎ、ハル長官は野村大使に対し「諒解案に対する返答がツレイトにならないように」との注意を数回にわたって与えたので、その都度東京に打電した。このような状況下に於て東京からは一片の通知さえなかったので大使以下の憂鬱は日ごとに増大した」(三〇〇頁)。

「四月一八日に突如としてワシントン大使館から本国政府に対し、諒解案が電送せられると本国政府は挙げて狂喜した。近衛総理は固より外務、陸軍、海軍に至るまで諒解案の主旨に同意し、字句の細部に拘泥せず同意の旨野村大使に訓令しようとする意見が有力であった。ところが近衛総理は臨時外相を兼ねていたのに拘らず、即時打電の決意をする代わりに、外遊中の松岡外相の帰朝を待つて処理することにした」。「松岡外相が空路立川飛行場に着陸したの

は四月二二日であった」(三〇〇頁)。

「大橋次官が日米諒解案の説明を始めると、松岡外相は『もう来たか』と漏らしたそうである」。その真意は「松岡外相がドイツからの帰途モスコに立ち寄った際、同地駐在の米国外務大臣ハート氏と会い、日米国交の回復について意見を交換していたので諒解案をそれに対する返答と勘違いした」ものらしい。「何事も自己の手柄としてうとする傾向の強かった松岡外相は『この諒解案は陸軍の謀略である』との偏見を抱くに至ったようである。そして松岡外相のこの偏見こそは日米交渉が成立しなかつた最大の理由となつた。しかし、それよりも問題なのは近衛総理兼外相の態度ではあるまいか」「諒解案が東京に到着したのは前述のように四月一八日であるが、近衛総理兼外相は、何故自己の職権に基づき、ワシントンに即答を与えなかつたのか」(三〇一頁)。

岩畔、近衛総理と会見す

後の祭だが、岩畔は帰国後近衛と二回会見し、真意を問うた。近衛の返事は次の二点であつた。「(i)この問題は国家の重大事件であるから数日後帰国することになつてゐる本職外相の帰国を待つて処理するのが妥当であると考えた。(ii)松岡君の心理状態があつたように錯乱してゐることを予想し得なかつた」「これに対し、近衛総理の側近後藤隆

之助氏は「近衛はその頑固な痔疾に悩まされて心身頓に衰弱していたので、自ら難局に当るの気魄を欠いていたようである」と説明してくれた」(三〇二頁)。日米戦争か、和平かという重大な岐路において、その舵取り役の総理はかくも優柔不断、意志決定を避ける小人物であつた。

もう一人の悪役は外相だ。「松岡外相は我々の失望を裏書きするかのようになり、日米諒解案に対する返答を故意に遅らせた。かくて我々は松岡外相は日米国交の打開に全く誠意がないものと思ひ始めた頃、正確に云うならば五月二二日に至つて初めて日米諒解案に対する日本政府の意見が到達した。請訓以来実に二四日である」(三〇八頁)。

こうして遅ればせながら、内閣の同意を得て、諒解案の個々の条項を詰めるための会談がスタートした。「野村・ハル会談は数十回に及んだが、五月中旬から六月下旬にわたる間の会談には日本側から野村大使のほか井川君と私とが、また米側からはハル長官とパレンタインとが参加した」「会談の回数が増えるに従つて『松岡外相に対する不信の態度が露骨になる』と共に『日米交渉の内容がドイツおよびイタリアに漏れてゐるとの発言』が増えた。このようなハル長官の言動から推して我々は次の判断に達した。○松岡外相では日米交渉を進捗させることは出来ない。○外務省の暗号が米國に解読せられてゐる」「第一の件に關

しては野村大使の要請に基づき、外相更迭の要あることが具申せられた」「第二の件に関しては何等の手も打たれなかつたが、戦後判明したところによれば外務省の暗号はことごとく米國に解読されていくこととなり」「日米交渉に関する我方の企図はことごとく相手方に知られていたことになり、我々は例外なく道化役者を演じた」(三〇九、三一一頁)。なるほど、そうなのだ。岩畔は栗栖に交渉への応援を依頼した。栗栖自身も岩畔の意に沿うべく大使館の若杉公使に電話した。そこで若杉は、国務省との応接に多忙だという理由で栗栖との面会を拒否した。この経緯をおそらくは電話盗聴等により熟知するハル長官は、「日米交渉を進めよという本国政府の意図」を何も知らずに、肝心の国務省との連絡を怠り、なおかつこれを口実に栗栖との会見を拒否した若杉公使を笑っている。この一幕を見ただけでも、日本外交は戦う前からすでに敗北していたことは明らかである。

岩畔の回想

岩畔は回想する。「もう一回印象的だったのはたしか六月二二日にハル長官の要請に基づき私の私室を訪れたときのことである」(「寢室の」ハル長官はおもむろに口を開き「独ソ開戦に関する見通しはどうか」と問うた)「大使は『的確な情報を入力していない』と答えるより外に返答の

しようがなかった。ハル長官の顔には『期待外れの色』が現れた」(三二四頁)。「一國を代表する大使ともあろう者が明後日に迫っていた独ソ開戦のことを知らなかった」、六月二二日夜、「大使館員一同に対し大使から『独ソ開戦の可能性』に関する質問があつたが、私を除いて、独ソ開戦必然論」を開陳した者はいなかつた」「問答が行われているときには既に独ソは戦争状態に入っていた」のであるから、迂闊を通り越した喜劇であつた」(三二五頁)。

「私が帰國を思うようになったのは六月二二日の独ソ開戦直後であつたが、之を実現したのは七月二六日の日本陸軍南部仏印進入事件並にその翌日の在米日本資産の凍結事件の直後であつた」(三二二頁)。

米國が日米首腦のホノルル会談を急いでいたことには、いくつかの背景があるが、最大の理由は、独ソ戦争開戦前の不安定な状況こそが最後のチャンスと見たからだ。独ソ開戦によって、米・英・ソの連合 (The Allied Powers) が一つの陣営に固まるならば、米・英・ソ対日・独・伊という構図が動かしがたいものとなる。「独ソが開戦せず、かつ日独枢軸もまだ固まっていな」段階こそが、日米関係修復の「最後の機会」と日米双方の専門家は見ていた。だが、日米諒解案は草案ができて、これを米國は当事國の中國政府 (蔣介石政権、汪精衛政権) との間で、日本撤兵の

主要項目	米 国	日米の比率
製鋼能力	9,500万トン	1対20
石油産出量	1.1億バレル	1対数百
石炭産出量	5億トン	1対10
電力	1,800万キロワット	1対6
アルミニウム	85万トン	1対6
飛行機の生産量	12万台	1対5
自動車生産量	620万台	1対50
船舶保有量	1,000万トン	1対2
工業労働者	3,400万人	1対5

資料：岩畔豪雄『昭和話陸軍謀略秘史』329頁

条件を検討しているうちに、独ソ開戦によって国際情勢は一変した。日本では半年の間に対米主戦派が主流になった。

岩畔は同じ龍田丸で渡米した新庄主計大佐の分析から日米の国力の圧倒的差異を熟知していた。

岩畔はいう。「数字から見た日米間の物質戦力の比率はひいき目に見ても一〇分の一以上でないことが明らかである。この数字を見て尚且つ戦争突入の決心を固めさせたものは先に述べたように、一つにはドイツの軍事力を過大に評価してこれ

に便乗しようとしたこと。二つには日本軍の精神力を過大評価すると共に米軍のそれを過小に評価したこと。三つには天佑神助に頼ろうとしたこと」（三三九頁）。

一九四一年八月頃の時点で岩畔の考えた対米方針は次の三案であった。「第一案：対米開戦論 第二案：日米国交回復論 第三案：情勢観望（日和見）論」である。第一案は「必敗の公算が大である」。第二案は「最も好ましい案であるが（中略）、日本に有利な条件で日米国交を調整し得たのは独ソ開戦以前のことである」。第三は「戦備を整えつつ形勢を観望しようとする案であるが、この案では既に盛り上がっている主戦熱に対抗することは出来ない。かくて日本国内には五・一五事件又は二・二六事件に似てそれよりも遙かに規模の大きいクーデタ乃至内乱が起り、主戦派の内閣が出現して対米戦争への突入が行われる公算が大である」「その頃私はまだ第二案に執着していた」（三三〇、三三三頁）。

最後に岩畔はこう結ぶ。「私は一九四五年八月一五日の聖断は史上稀に見る大英断であり、日本の天皇でなければ実現し得なかつたと思う。若しこの大英断が一九四一年の夏に下されていたらと思うからではなく、私がここに天皇を引き合いに出すのは天皇の責任を追及する意思からではなく、天皇の偉大な力のみが当時の難局を救い得る唯一の

決め手であったことを指摘したに過ぎない」(三四〇頁)

朝河貫一がルーズベルト大統領親書の代筆というラングドン・ウォーナーの提案に賛同して朝河草案を執筆した決意と職業軍人岩畔豪雄の考えた天皇の聖断論とは、その人的背景のさまざまな違いにもかかわらず、一脈相通するものがある。

注

1 一九五一年のサンフランシスコ講和には、蒋介石も毛沢東も招かれず、蒋介石の中華民国とは一九五二年に日華条約を結び、毛沢東の中華人民共和国とは一九七二年に日中共同声明を調印した。講和が三段階に分かれたのは、必ずしも日本のみの責任ではなからず。しかしながら、これを一因とする健忘症に無反省なのは、弁解の余地がなからず。

2 Mr. Wikawa inferred that he was the unofficial representative of a group of influential persons in Japan who desire to see an improvement in Japanese-American relations. From subsequent remarks he made, it appears that he is, in some way, preparing for the visit of another individual, one Colonel Iwakuro-whom

he described as being one of "the driving forces of the Army". *The Assistant Commercial Attache in Japan (Smith), on Leave, to the Secretary of State Vancouver*, February 25, 1941. *Foreign Relations*, 1941, Volume IV, page 52.

3 On March 8 the Japanese Ambassador called on me at my apartment on the basis of a joint and equal initiative on his and my part growing out of his talk with the President at the time he presented his credentials. When I inquired as to further details of the proposed Chinese-Japanese peace, the Ambassador made no specific comment but said that his adviser, Colonel Iwakuro, was on his way here and that Colonel Iwakuro had intimate details of the whole Chinese-Japanese situation. *The Secretary of State to the Ambassador in Japan (Grew) Washington*, March 11, 1941-7 p.m. *Foreign Relations*, 1941, Volume IV, page 66.

4 機密保持のしるし。 Written notation at top of document : "N. B. Mr. Wikawa has read, and agreed to, this memo with the stipulation that

it must remain absolutely confidential to yourself and the two other persons thus far concerned." Initialed apparently by Father James M. Drought, transmitted to Mr. Walker for the Secretary of State and President Roosevelt, and "Reached SKH[ornbeck] on III-15-1941." 本へなる各語じりし。The Japanese delegates to the Honolulu Conference have been considered tentatively as Prince Konoye, Baron Wakatsuki; Baron Goh; Baron Hiranuma, General Muto or Iwakuro for the Army, Admiral Oka for the Navy and four others to total ten delegates, not counting experts, clerks, etc. *The Postmaster General (Walker) to the Secretary of State Memo, Foreign Relations, 1941, Volume IV page70.*

⑤ This afternoon, Ambassador Kurusu telephoned the Japanese Embassy at Washington but Wakasugi, the Minister there, said he was "too busy" to see him! Wakasugi says he is "preparing business for the U. S. State Department", but, actually, he knows very little of the real intentions of his home Government.

The Postmaster General (Walker) to the Secretary of State Memo Foreign Relations, 1941, Volume IV page74.

⑥ States would be "one of the most stupid events that ever occurred." He insisted that he was in a position to say that Japan would not resort to force in carrying out her program of southward expansion and denied that Japanese forces were preparing to take military, air and naval bases in Indochina and Thailand. *The Ambassador in Japan (Grew) to the Secretary of State, No. 5443 Tokyo, March 13, 1941.* [Received April 2.] *The Postmaster General (Walker) to the Secretary of State Memo Foreign Relations, 1941, Volume IV page75.*

⑦ 当時ハル国務長官はカールトン・ホテルに宿泊していた。三月八日夜七時野村大使はホテルの裏口から会談を登り、ハル長官の個室を訪問して、野村ハル会談が実現した。若杉公使以下大使館幹部は「国務長官がこのちやうな方法で会見することは常識的にいってもあり得なう」と反対していた。

2015年12月25日発行

第4期
2015・2016
12月・1月新年合併号

変革のための総合誌

情況

文明史の転換と科学批判・シリア特集

情
変革のための
総合誌
況

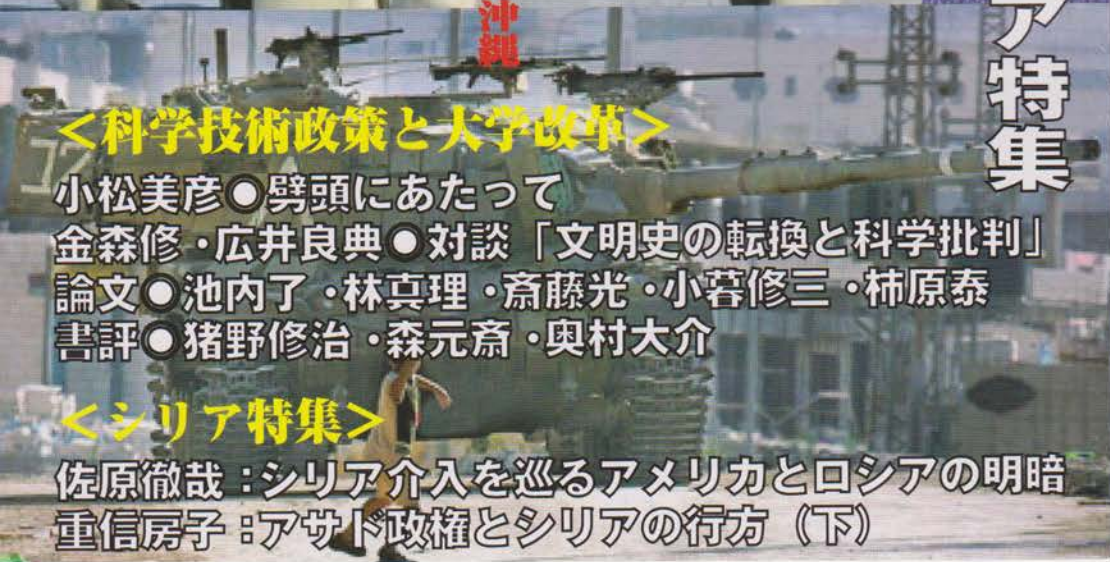
2015
2016
第四期
12・1月
新年合併号

文明史の転換と科学批判・シリア特集

情況出版



- 矢吹吉
- 中国観照 (第八回)
- 米中二極体制 (中)
- 矢沢国光
- 深沢一夫
- 巻頭言 新日米同盟と沖縄
- 〈巻頭〉



<科学技術政策と大学改革>

小松美彦●劈頭にあたって
 金森修・広井良典●対談「文明史の転換と科学批判」
 論文●池内了・林真理・斎藤光・小暮修三・柿原泰
 書評●猪野修治・森元斎・奥村大介

<シリア特集>

佐原徹哉：シリア介入を巡るアメリカとロシアの明暗
 重信房子：アサド政権とシリアの行方 (下)